

文覚上人について

この「文覚上人」は資料の中に、源頼朝との関係人として、度々書かれて、その経歴について興味があり、且、激しく生きた人だと感じているので、私見として説明します。

「文覚上人」の前半

文覚は遠藤盛遠という北面の武士でした。同僚には平清盛、佐藤義清や源渡がいました。佐藤義清は後の西行です。盛遠には幼なじみの袈裟御前がいました。袈裟御前は涼しい目元に凜とした気品のある桔梗の花のように美しい人でした。そして、

鳥羽上皇の皇女・統子内親王（上西門院）に仕えていました。盛遠はこの袈裟を恋いこがれていました。しかし、袈裟は同僚の従兄弟の源渡に嫁いでしまいました。傍目からも羨ましがられる仲の良い幸せな夫婦でした。

ですが、盛遠は諦めきれず、袈裟御前に言い寄ります。袈裟は盛遠にきっぱりと断ったのですが、「ならば、そなたの母を殺し、我も腹を切る」と恐ろしいことを言い出します。

困り果てた袈裟は「わたくしは夫のある身です。いっそのこと、夫を亡き者に…さすれば、あなた様の御心に浴えましょう」と泣きながら言いました。そして「今晚八つの鐘を合図に当屋敷に忍び込み、東より二つ目が夫の寢所にございます。お酒を飲ませ休ませておきますれば、洗い髪を頼りに夫をお

討ちください」という袈裟御前の言葉通りに実行したのです。

盛遠は斬り落とした首を抱いて屋敷から走り出たのですが、月明かりの中でその首をみて仰天しました。

それは、なんと源渡ではなく、愛しい袈裟御前の顔だったのです。それは、一途に自分を思ってくれる盛遠と愛する夫との板挟みになって煩惱した末の袈裟御前の決断でした。

あくる朝、身を淨めて白き浄衣に着替えた盛遠は、己の首討たせんと、源渡の館を訪ねました。ところが源渡は、彼の罪を一向に咎めようとせず、裁きを神仏に委ねるとして、出家すると申します。

源渡の予期せぬ言葉に、重荷を背負った盛遠も、この世の無常を思い知って、黒染

めの衣に身を包み、武士の名を棄て名前は、雲水「文覚」となりました。十九の年でした。

「文覚上人」の後半

出家して「修行とは如何ほどの大事やらん、試して見ん」として、6月（新暦8月頃）の草木の萌ゆる、照りつける最中に、藪の中へ入り、裸になって仰向けに寝転び・・・蛇、蚊、蜂、蟻、など毒虫が身に取っついて、刺し、食うのも厭わずに、七日間は動かさず、ようやく8日目になって、むくくと起き上がり、修行の旅へ出立することになりました。熊野での修行は、厳寒の那智の滝に打たれ、千日の修行を行ったと伝わります。その後、大峰3度、葛城2度、高野、金峰山、白山、立山、富士の峰、戸隠、出羽の羽黒等歩き回り、修行を重ね、京の都に舞い戻ります。

そして、京は高雄の神護寺の荒れ果てた姿に、その再興を誓い、大願を起こします。勸進帳を携えて、方々の檀家に奉加（寄附）を勧め歩きました。勢い余って後白河法皇にも勸進を強訴してしまふ。これが後白河法皇の逆鱗に触れ、打ち首にされるところを、伊豆國へ配流されます。

そこは、源氏の嫡流源頼朝が流されていた「蛭ヶ小島」からそう遠くないところでした。頼朝と文覚は、ほどなく親交が始まり、2人の親交は日増しに深まっていった。そして、文覚は頼朝に平氏討伐の拳兵を勧め、頼朝は石橋山の戦いに臨んだといわれる。

「源頼朝」の弁財天の勧請
文覚上人の調伏祈禱

奥州藤原四代の滅亡

養和2年（1182）、源頼朝は奥州平泉の藤原秀衡調伏のため、文覚に命じて江の島に弁財天を勧請しました。

4月5日、その供養のため、足利義兼、北条時政、畠山重忠、結城朝光、上総広常、土肥実平、佐々木盛綱、和田義盛ら御家人を共として江の島を訪れます。義経は外されます。

文覚上人は、そのまま江の島に籠り、21日間の断食をして祈りを捧げたということです。

藤原秀衡は文治3年（1187）に亡くなり
なりました。これにより、奥州藤原氏の家督は
「藤原泰衡」へと引き継がれます。

泰衡は文治5年（1189）4月30
日、義経の衣川館を攻め、義経を自刃に追
い込みます。

文治5年8月11日、源頼朝に平泉を攻
められ藤原泰衡は逃亡し、奥州藤原4代はこ
こで終焉を迎えるのです。

（文責・清藤）